

『青々と』 - めけ

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

「真希一。ちょっといいか？」

ノックとともに兄の声。私は溜息とともに、文庫本をパタンと閉じた。

(いい所だったのに……)

推理小説の醍醐味は人によりけりだろうが、私の場合はなんといっても解決編である。謎が明らかになる瞬間というのは、やはり気持ちのいいものだからだ。一行一行、いや一文字一文字を目で追うのすらもどかしくなる程に、答えを求めてのめり込む。世界は自分と本だけで、誰にも邪魔はされたくない。

だというのに。

(何で真犯人明かすシーンで、声をかけてくるかなあ……)

分かっている。私が本を読んでいたのを兄が知るはずがないし、彼に悪気は決してない。全てはタイミングの問題なのだ。大学から帰宅後ほとんど部屋に引きこもっている兄が、たまたま偶然絶妙なタイミングで私の部屋を訪れたまでのことだ。

「真希～？」

私の返事がなかったからだろうが、ドアの向こうから再度間延びした声が聞こえてくる。

「はい、今開けるから」

言いながら机に本を置き、ドアを開けるべく席を立つ。

にしても真犯人は一体誰なのだろう。鈴木さんだろうか、それとも西條さんなのか……。

答えは無論出るはずもなく、そのままドアへと辿り着く。それでも頭の片隅では真犯人のことを考えつつ、私はがちゃりとドアを開けた。

そこにいたのは、小柄な私には羨ましいくらい長身の兄。私は兄を見上げ、思ったまを口にする。

「お兄ちゃん何かあったの？ 珍しいじゃん、部屋に来るなんて」

「いやあ、そーいやお前にあげてなかったなあって思って。入学祝い」

頭を掻いて笑う兄。言われてみると、確かにもらってないような気はするが。

「そうだけど……別にいいよ、私もお兄ちゃんにあげてないし」

というかもうすぐ六月である。高校に慣れるどころか中だるみに突入しつつあるというのに、何故今更入学祝いなのだ。

そんな私の心中を知ってか知らずか、兄はへらへらと笑って続けた。

「遠慮すんなって。実は今部屋を片付けててな、こんなモンが出てきたんだよ」

そう言って何かを差し出してくる。こんなモンとやりに全く興味はなかったが、一応入学祝いらしいし、無理に拒絶する理由もない。私はそれを受け取り、一言呟いた。

「……鍵？」

銀色の小さな鍵。ただそれだけだった。

この鍵が何だというのか。意味が分からず視線で問いかけると、兄は小さく頷いて説明してくれた。

「それはな、学校の屋上の鍵なんだ」

「へえ……って、え？」

一瞬さりと聞き流してから、引っかけりを覚える。

「何でお兄ちゃんがそんな物持ってんの？」

「別に不思議じゃないだろ、俺もお前と同じ高校に通ってたんだから」

「そうじゃなくて！ 屋上の鍵なんて普通持てるような物じゃないじゃん。どうやって手に入れたのさ？」

いつものことながら、兄のピントのずれた答えはもどかしくて仕方がない。

私が忍耐強く問い直すと、ようやく兄は合点がいったらしい。ああと頷いて事も無げ

に、

「元々屋上に付いてた鍵を壊して、俺が新しいのを取り付けたんだよ。ま、百均の安モンの錠前だけだな」

「……何でそんなことを？」

「ほら、漫画とかであるだろ？ 授業サボって屋上で昼寝って。それをやりたかったんだよ」

「……………それなら別に、鍵壊すだけでいいじゃん。わざわざ新しい鍵を付けなくてもさ」

「馬鹿だなあ。鍵付けなかったら、他の奴も屋上行けちゃうだろ？ 俺だけの屋上ってというのがいいんじゃないか」

……駄目だ。爽やかに笑って語ってる時点で、この人には自分が犯罪チックなことをやったっていう自覚が全くない。しかも理由が史上最低くならない。煩惱の赴くままってというのは、きつとこういうことをいうのだろう。

「……お兄ちゃんって、机に自分の名前彫るタイプでしょ」

「ああ、俺が座った席全てに彫ったぞ。今度探してみろよ、すぐに見つかるから」

「……………」

——ねえ、ここに彫ってある美空祐介って人、ひょっとして真希のお兄ちゃん？

そう聞かれたら、力の限り違うと答えよう。

「……それはそうとさ、こんな鍵もらっても私別に使わないよ？」

心の中で小さな決心をしながら、私は話を鍵へと戻す。が、兄は先程までの笑顔を保ったまま、怯むことなく返してきた。

「そう言うなって。一度だけでもいいからさ。すっげえイイ景色も見れるぞ」

「私そういうのに興味無いもん」

「じゃあこれを機会に持てばいいじゃないか。いい考えだ、うん。素晴らしいな俺」

「いやそんな自画自賛されても……」

「んじゃ、ちゃんと使えよー」

「ちょ……お兄ちゃんっ」

私の制止も虚しく、兄は言うだけ言って自室に戻って行ってしまった。残されたのは、私の手にある小さな鍵。こうなってはもう受け取るしかなく、私は不本意ながらも机へと戻った。とりあえずは鈴木さんか西條さん、どちらが真犯人なのかを知る為に。

……にしても、兄は入学祝いと言っていたが。

(……どう考えても、処分に困ってたモノを私に押し付けただけじゃん……)

——ちなみに真犯人は河本さんだった。

「——へえ～。これがその屋上の鍵？」

「らしいよ、お兄ちゃんが言うにはね」

手渡された鍵を興味深げに眺める少女に返事をしながら、自分が呆れているのを自覚する。第三者に話すことで、兄のアホらしさを再認識してしまった。

昨日から一夜明けての朝の登校。学校が同じなため毎日幼馴染と登校しているのだが、鍵の話が出たのはその道中。うっかり口を滑らせた私に、幼馴染——由美がすぐさま食いついてきた。仕方なく昨日の出来事を話し、今に至るというわけだ。

「ねえねえ、やっぱり真希ちゃんも使うわけ？」

鍵を返してきながら、さり気なさを装って尋ねてくる由美。しかし期待が色濃く浮き出た彼女の目を、私が見逃す筈もなかった。鍵を受け取りかぶりを振ると、

「まさか。屋上なんてどうでもいいし、もし使ってる所を見られたら厄介なことになるじゃん。わざわざリスクを冒すつもりはないよ——もちろん由美にも使わせないからね」

「……そっかあ……だよねえ……」

念を押され、分かりやすいくらいにがっくりと肩を落とす由美。ぬか喜びさせたように悪いことをした気もするが、まあ仕方がない。

彼女が鍵を手にしたらどうなるか。おっとりとした見かけとは裏腹に、やることの大

胆さでは兄に引けをとらない彼女のことだ。きっと兄を見習って、授業をサボり屋上で昼寝とかするだろう。彼女の成績を知る私としては、進んでそれを手伝う気にはなれなかった。

(……にしてもこれ、どうやって学校の鍵と取り換えよう……)

鍵を鞆の内ポケットにしまいながら、そんなことを考える。学校に保管されてる鍵は壊された方のものだから、取り換えるのが最後まで腐れがなくていいのだろうが……生憎と、こっそり取り換える方法が浮かばない。

別に自分のせいじゃないのだから、鍵のことなど忘れてほっとくか、鍵を捨てればいいのに……とも思うのだが、私は良くも悪くも根が真面目だ。知らん顔したままでいるなんて、居心地が悪くて仕方がない。捨てるのも無論NGだ。負う必要のない罪悪感を感じてなんだか嫌になる。

「勘弁してよ、もう……」

「? 何か言った真希ちゃん？」

「あ、いや何でもないよっ」

嘆きが声に出たらしい。私は慌ててかぶりを振り、話題を変えることにした。ここで愚痴を言っても始まらない。

と想像していたら、由美の方から話題を変えてきてくれた。どうやら屋上の件は潔く(?) 諦めてくれたらしい。

「ねえ真希ちゃん。今日はさ、晴れると思う？」

「? 今晴れてるじゃん」

思った通りに答えたのだが、由美はお気に召さなかったようだ。空を指差し腕をぶぶん振って抗議してきた。

「全然晴れてないよー。これは曇りっ。雲がいっぱいあるでしょ」

私は由美の指先を目で追って空を一瞥すると、すぐに由美へと視線を戻した。

「大方晴れてるんだから別にいいじゃん。あからさまな雨雲はないんだし」

自分で言っておいてあからさまな雨雲って何だと思ったが、それを気にしたのは私だけだったらしい。由美はぎゅっとう拳を握り、

「だめだよ、もっとこう——青空がたくさん見えなきゃ! ……なのにもう一週間ぐらい晴れてないんだよ。梅雨はまだなのに……」

溜息について、今度は恋い焦がれるように空を見上げる由美。青空を敢えて嫌う人は少ないだろうが、ここまで厳密に青空を求める人も少ないのではないかと思う。

「由美って本当、青空が好きだよね」

半ば呆れながら言うと、由美は満面の笑みで答えてきた。

「うん! だって青空って気持ちいいじゃん。空自体好きだけど、青空は元気が出るから大好きなのっ」

「いつも授業中、空ばっか見てるもんね」

「そうそう、何も考えずにぼーっと眺めるのがいいんだよね」

頼むから少しは授業のこと考えて欲しい。

「そっぴや、真希ちゃんはある程度そういうことしないよね」

「授業中何も考えずにぼーっと空を眺めて、テスト前に幼馴染に泣きつくってことを？」

「違うよ〜」

何で急にそんな話になるのお、と手をぱたぱた振って笑う由美。分かってはいたが、これだけストレートな皮肉にも気づいてもらえないと、なんだか虚しい気持ちになる。

「私が言いたいのは、真希ちゃんって景色を楽しむとかしない人だよ、ってこと」

「う……ん。まあね」

否定することも出来ず、ただ認める。

私は典型的な日本人というか、予定を詰め込んで時間に追われるタイプなのだ。だからなのか、自然とそういう機会を逸してしまう。……別に敢えて避けているわけではない……とは思っただが。

と、由美がにっこりと笑みを浮かべてきた。

「私思うんだけどさ。たまには景色を眺めるのもいいんじゃないかな」

「……そうだね」

その瞬間、私は確かに嫌な予感がした。そしてそれは、ものの見事に的中したのだ。

私の同意を得た瞬間、由美が少女漫画もびっくりな程に瞳をきらきら輝かせ、「本当？ じゃあさじゃあさ、やっぱりオススメは屋上だと思うんだよね絶対！ きっと素敵な景色が見れるよ。絶対真希ちゃんも空が大好きになるって！ ほらほら、行ってみたいと思わない？」

……まだ諦めてないとは。そんなに屋上に行きたいのだろうか……純真無垢な瞳に一瞬心が揺らぐが、やはり鍵を渡すわけにはいかない。私は頑然と由美を見つめると、

「あのね。さっきも言ったけど、由美に鍵を渡すつもりは——」

「ないんだよね？」

「え？ ……う、うん……」

由美の予想外な言葉に思わずたじろぎ、足が止まる。由美もそれに合わせて立ち止まり、何故だか胸を張って言ってきた。

「その鍵は今は真希ちゃんのものだし、真希ちゃんが駄目っていうなら私はちゃんと諦めるよ。それくらいの分別は持ってるつもり。私が言いたいのは、真希ちゃんが行って見たらどうかってこと」

「……いや、だからそんなリスクを冒すつもりは——」

「もし鍵が換えられてたらどうするの？」

「……え？」

まさに突然の右フック。全く考慮外だった可能性を指摘され、私の反駁が中断する。

由美はそこに隙を見つけたのか、一気に畳み掛けてきた。

「多分真希ちゃんのことだから、それを学校に返そうとか考えてるんだろうけど……もし学校が鍵のすり替えに気付いたら？ そしたら当然鍵を換えるよね。だったらその鍵は使えないってことで、返す必要もなくなるよ。一度鍵を使って、それを確かめてみても損はないと思うんだけどな」

「ま、まあ……ね」

確かに正論であった。いくら屋上が完全放置な場所であっても、気まぐれに鍵の点検をされている可能性はある……なんか見事に由美の誘導に乗っている気もするが。

脈ありとみたのか由美は一旦身を引くと、私の右手を両手でしっかりと握ってきた。

「でさでさ、もしその鍵が使えたら、私お願いがあるんだけど……」

「……………」

「屋上から見た空の景色を、写メで撮って送って欲しいんだ♪ それだけなら簡単でしょ？ ね？」

「……………」

「……ね？」

……まあ、写メぐらいならいいか。

……………なんか面倒臭くなってきたし。

「……分かった」

ぼそりとそう告げて、私は歩みを再開した。後ろから追って来る歓声に嘆息しながら。

(そろそろいいかな……)

放課後生徒が帰宅するか部活へ行くかして、校舎の人氣がある程度なくなるのを待ち。

「よし」

私は覚悟を決めて教室を出て、屋上へと向かった。この時間帯なら誰かに見られる可能性も低いだろう。

私の学校は二階に一年、三階に二年、四階に三年生の教室が並んでいる。部活に使われる教室は一階から順に埋めていって三階まで。つまり屋上へと続く四階は廊下等の人の行き来が皆無と言ってもいい程で、私にとって大いに都合がよろしいのだ。

廊下を過ぎて階段へと差し掛かり、ゆっくりと上っていく。階が上がるごとに人気がなくなっていくのが何となく分かった。そしてそのまま四階へと辿り着いた。四階の教室は時々三年が残って勉強の為に使っているのだが、今日は幸いなことに階段近くの教室に人がいる気配はない。

(廊下にも人はいないし、これは今のうちにとっとと終わらせた方がいいかもね)

都合のいい状況に勢いついた私は自分を奮い立たせるべく、屋上へと続く最後の階段を見上げた。と、踊り場に立札が立っているのが目に入る。

『何があろうと絶対立入禁止』

「……………」

やっぱり止めようかなという気になった。

ていうか力いっぱい禁止を主張し過ぎなような気もする。やはり兄の所業はバレていたのだろうか。

(まあそっちの方が楽なんだけどね……)

バレていたということは鍵も取り換えられているはずで、私がこっそり職員室の鍵と取り換える必要もないわけで。

しかし確証がない以上ここで引き下がる訳にもいかない。私は再び活を入れて、とうとう階段を上りはじめた。念の為足音を忍ばせて。

一段、二段、三段……

踊り場に着き、立札を通り過ぎる。という所で私はほっと息を吐いた。踊り場から上は四階からでは見えない為、いくぶんか気楽に上れるからだ。いくら人気がないとはいえ、目撃される可能性がある限りやはり緊張は強いられてしまう。

最後の十三段目に足をかけ、そのまま視線を正面に這わせると。

当たり前だが、屋上へ出る為の扉がそこにはあった。

私は逸(はや)る気持ちを抑える為に、敢えてゆっくりと扉に近づいた。取っ手の部分へと視線を走らせ――

(……お兄ちゃん……)

恐らくは目の前の結果を残したであろう兄に対し、呆れとも恐れともつかぬものを抱く。

扉は両開き式のため取っ手は中央に二つあったのだが、その二つが鎖でぐるぐる巻きにされ、鎖の両端が錠前で繋ぎとめられていたのだ。ちなみに取っ手の下に鍵穴が一応付いてはいたが、明らかに抉じ開けられた形跡があった。

私はてっきり錠前式の鍵を壊してから、新しい錠前式の鍵を取り付けたのだと思っていたのだが……まさかここまで問答無用に鍵を壊して、取っ手を鎖でぐるぐる巻きにしたなどとは思もしなかった。

無論鎖ぐるぐる巻きの方は兄の仕業とは言い切れない。鍵のすり替えに気づいた学校が、兄の鍵を壊して付け直したのかもしれないし。

が、鍵をこじ開けたのは兄に違いない。更には何故だか段ボールで塞がれた、扉に付いた窓らしきもの……これも兄かも知れない。

私は今日一番の盛大な溜息を一つ吐くと、鞆の内ポケットを探って鍵を取り出した。この鍵が使えないならそれでいいが、使えるならばやる事が色々ある。そうそうのんびりとはしてられない。それに万が一の可能性として、誰かがここに来るかもしれないし。

恐る恐る錠前の鍵穴に鍵を差し込み、ゆっくりと回すと――

カチャリ

小気味い音を立て、錠前が開いた。

私は安堵の息をつき、そんな自分に驚いた。鍵が合うということは面倒事が増えるというだけなのに、何故私は喜んでいるのか。

(やっぱり何だかんだいって、私も屋上行って見たかったのかな?)

確かにここまで来たからには、この扉の向こうを覗いてみたい気もするが。

(じゃ、さっさと開けますか)

現金な自分に苦笑し、多少胸をときめかせつつ錠前を外す。それをひとまず制服のポケットにしまってから、かなり慎重に鎖を解いていく。

もどかしさに苛立って仕方が無いが、鎖のジャラジャラという音はかなり響く。音を立てないように最大限の注意を払うに越したことはない。兄はきっとそんなこと気にもせず、豪快に開けてたのだろうが……。

「——ふう」

ようやく解き終わり、鎖をまとめて左手に持つ。意味のない達成感が私を包んだ。

(いよいよ、かな)

取っ手を握り、この瞬間を噛みしめるかのように、ゆっくりと扉を開いていく。

扉の隙間から徐々に光が洩れてきて、薄暗い世界にいた私は眩しさに目を細めた。

私が通れるぎりぎりの隙間が出来るまで開くと、するりと外に出て後ろ手に扉をそつと閉める。そのまま扉に背をもたれさせ、私はずるずると地面に座り込んでいった。

「あー、疲れた……」

ようやくまともに息が出来た気がする。

ぼんやり辺りを見回すと、縁の方に数羽の鳥が確認できた。が、それだけだった。他には誰もいないし何もない。寂寥感が屋上一帯を支配していた。

(……っと。写真撮らなきゃ)

やるべきことを思い出し、鞆から携帯を取り出す。携帯以外はその場に残して立ち上がり、私は屋上の縁に向かって歩き出した。

(ん……ここら辺、かな)

あまり縁に近づくと危ないので、ある程度歩を進めた所で足を止める。

私は携帯をカメラモードに切り換えると、手ブレしないようにしっかりと掲げ、シャッターボタンを一押しした。

カシャ。

という音とともに、画面内の景色が固定される。空と町並みがバランスよく画面に収まっているのを確認し、データフォルダに保存する。

念の為にもう二、三枚写真を撮って。

(ま、こんなところかな)

これで由美も満足してくれるだろう。私は携帯を胸ポケットにしまうと、ぐるりと身体を反転させた。

そして一瞬硬直する。

「……え？」

私と扉を結ぶ一直線状のライン。そこには——誰もいない筈のそこには、何故か男の子が一人立っていた。十歳くらいだろうか、背も低く顔立ちもまだまだ幼い。

と、そこまで観察したところで男の子が話しかけてきた。申し訳なさそうに口を開き、

「その様子だと驚かしちゃったみたいだね。ごめん、僕なりに気は遣ってみただけど」

そう言う彼の口調と表情は、子供の癖にやたらと大人びていた。よくよく見ると佇まいにも、どこか悠然としたものが感じられる。

男の子は微笑んで続ける。

「僕はハル。君の名前は？」

「真希……」

半ば反射的に答えた所で、固まりかけた思考回路が復活する。男の子——ハルを見て最初に浮かぶ筈だったのであろう疑問が、次々と頭を駆け巡った。

「あの、ハル君——」

「ハルでいいよ。それと、小さい子に接するような話し方もしなくていいからね」

……この少年と会話をしていると、なんだか自分の方が年下のような錯覚に陥ってしまう。私は小さく吐息をもらし、途切れた言葉を再度紡ぎ出した。

「——じゃあさハル。ハルは何でこんな所にいるの？ ていうか一体、どうやってここまで来たの？ 先生や生徒の目をかいくぐってさ」

しかも屋上なんて、私がさっき意を決して開けたばかりなのに……。高校とは無関係のハルが平然と屋上(ここ)に立っていることに、私は激しい不条理を感じていた。

ハルは私の質問を見越してたかのように、ひとつ大きく頷いた。

「マキってさ、神とか幽霊って信じる？」

「……へ？」

いきなりといえばいきなりの話題転換に、私の目が点になる。

ていうか私の質問、堂々スルー？ ……。

「どう？ いわゆる科学では立証出来ないっていう存在を、君は信じる方なのかい？」

再度聞いてくるハル。人の質問を無視した割にはふざけた質問に思えたが、ここで拗ねるのも大人気ない気がする。私は一応、じっくりと考えて結論を出した。

「……いや、信じない方かな。実際に遭遇したらさすがに認めるだろうけど」

「へえ。じゃあ遭遇したら認めるんだね？」

「まあ、ね……」

念押しするように聞いてくるハルに頷き返すと、彼は私の方へと近づいてきた。五十センチ程の距離まで来ると立ち止まり、私の顔を見上げてくる。

「しっかり見ててね」

何を？

そう聞く前に、事は起こった。

さっきまで私を見上げていたハルの目線。その位置が、徐々に上へ、上へ……。

そしてついに私の頭頂ラインを追い越し、そこで止まった。

「……………嘘……」

「どう？ 見ての通りボクは人間じゃないんだけど、信じてくれるかな？」

無邪気に述べるハルに対して、私は返す言葉が全くなかった。

ハルは宙に浮いていたのだ。足が地面から完全に離れている。……種も仕掛けも何もない、正真正銘彼は浮いていた。

私はきっと、笑えるくらいに茫然としていたのだろう。ハルは私を面白そうに眺めると、地面との接触を絶った足をぶらぶら見せびらかした。それはもう楽しそうに。

「ね、これでさっきの疑問も解決だろ？ なんてったって人間じゃないんだから」

「……………」

「ね？」

念押ししてくるハルを見上げて、私はただコココクと頷き返した。

ハルは私の答えに満足気に頷くと、再びゆっくり地面へと降り立った。

「幽霊なんて本当にいたんだ……」

私がハルを見ながらポツリと呟くと。

「は？ 僕がいつ幽霊だって言ったんだい？」

ハルは少し驚いたようにこちらを見上げてきた。

「えっ！ 違うの？」

何の疑いもなく幽霊だと思った私は、心の底から驚いてしまった。

「違うよ。まあ似たようなモノと言ってしまうと、それまでなんだけどね」

そう言うとハルは、地面に座り込んで自分の隣をぼんぼんと手で叩いた。座れということらしい。

私は特に躊躇することもなくそれに従った。ハルが人間じゃない——どころか幽霊でもないと分かって、不思議と怖さは感じなかった。所詮人間なんて視覚の生き物である。もし相手がぐろげちゃでエグい姿をしていたら、私は迷うことなく全力で撤退してただろう。

「でもさ、幽霊じゃなきゃ何なの一体？」

ハルの隣に座ってから改めて問い直すと、彼はあっさりと言い放った。

「ボクは神なんだ」

「……紙？」

「無理にボケないで。神だよ神。ゴッドの神」

少し冷たい目で返してくるハル。かなり呆れられたような気がするので、私は一応

弁明をした。

「だって神ってあれでしょ、いわゆる世界の創造主。ハルって全然それっぽくないじゃん」

「君ってさりげなく失礼だね。まあいいけど。……ボクは、神だけど創造主ではないよ。そうだな、君らの言葉で表すなら……晴神(せいじん)ってところかな。晴れの神様」

「晴れの……神様？」

「うん。ボクの役目は空を晴らすこと。君らの間では、風神雷神は知られてるんだろ？ それ系統とを考えてくれて差し支えないよ」

「ふうん……」

ハルのここまでの説明を、腕を組んで反芻する。

ハルが人間じゃないと分かったら、今度は神だなんて……。

常識的に考えたら、胡散臭いことこの上ない話だ。が、恐らくは事実だろうという気もした。

というのも、人間でない彼が私を騙して得することなど、何一つとしてないからだ。それに何より、私には彼が嘘をついてるようには見えなかった。

「やっぱり急に言われても信じられないかな」

私が黙り込んだことで、話の信憑性が疑われていると感じたのだろう。ハルが様子を窺うように、私の顔を覗きこんできた。

「ううん、信じるよ。ちょっと頭の中を整理してただけ」

私がそう言ったらハルはほっと息を吐き出した。

「マキが話の分かる人で良かったよ。初めて人間に話しかけた時は酷かったんだから。神主だったんだけどさ、僕を見た途端に悪霊退散って叫んでさ。神界(しんかい)の者を悪霊呼ばわりなんて、全くいい度胸してるよ」

苦笑して述べるハルの言葉から、耳慣れない単語を一つ聞き取って。

「神界？ って、いわゆる天界のこと？」

眉をひそめて尋ねると、ハルは顎に手を当てしばし考え込んだ。

「……ちょっと違うけど、まあそんな所かな。僕達はそこで君達の世界——君らの間では地界っていうんだっけ？——の均衡を保つべく、各々の役割を果たしてるんだ」

「なるほど……」

ただただ頷き、そして。

「——って、ちょっと待って」

唐突に私はストップをかけた。

「神が神界でその、仕事？ をやるっていうなら、何でハルがこの世界にいるの？」
ハルは神だ。つまり彼の話からすると、ハルは神界でせっせとお仕事(?)をしている筈。矛盾しているではないか。

ハルは別にと肩をすくめると、

「僕だって基本的には神界にいるよ。でもあそこはあまり落ち着かなくてね、たまにこっちに気晴らしに来るんだ」

「落ち着かない、ねえ……」

私にはちょっとピンと来なかった。自分の今いる『世界』を落ち着かないと感じたことは、生まれてこの方一度もないからだ——というより普通はそうだろう。生まれた『世界』が自分の基準で、それをもとに落ち着くという感覚が育つ。世界が落ち着かないなんて……。

「神界ってそんなに居辛い所なの？」

「僕にとってはね。神になってから結構経つけど、未だにあの堅苦しさだけは苦手なんだ」

「へ？」

何かまたすごい発言を聞いた気がする。

「ハルって最初は神じゃなかったの？」

「まあね。……神ってどのように創り出されるか知ってるかい？」

私が首を横に振ると、ハルは「だろうね」と頷いて先を続けた。

「神を創り出すには、魂が必要なんだ。とびつきり純粹無垢なね。そしてそれをもとに神が生まれる」

「……ってことはハルって——」

「元はマキと同じ、この世界で生まれた生命(いのち)さ」

ハルは自分の言葉がもたらした効果を、存分に味わっているように思えた。啞然として私を見て、くつつつと笑っている。

「ちなみに神になっても魂の記憶や自我は残るんだよ。神としての自我や外見も、それをもとに形成されるからね。この場所にも——」

と、ここで地面を指差すハル。

「僕の魂が強くひかれるから来るんだ。ここは、神になる前の僕が最後にいた場所。初心に帰る、って訳でもないけど、地界にいる時は必ずここで過ごすんだ」

「なるほど……」

段々と分かってきた。恐らくハルは、元は人間の子供だったのだろう。しかも彼の話から判断するに、この地域の子である可能性が高い。

黒髪黒目に、黄褐色の肌の人間。

何故神であるハルがそんな姿なのかは、それできちんと説明がつく。多分、それがハルの人間時代の姿なのだ。

更には服の感じから見て、そんなに昔に神になった訳ではないだろう。だが彼の自我の確立具合から、人間時代よりも長く神をやっているのは確かだ。

私は根拠をもとに、一つ一つ推論を積み重ねていった。なんだか探偵になったような気分だ。

「——本音を言えば、ずっとこっちにいたいんだけどね」

溜息交じりのハルの言葉に、私の思考が中断された。

「だめなの？ こっちの世界にいてもやるべき事をやってれば、別にいいと思うんだけど……」

「僕もそう思うけど駄目なんだ。本当は地界の者と話すどころか、そこに行くことすら禁止されてる。十日くらいなら何とか誤魔化せるけど、それより長くは多分バレルかな」

「なんか不自由だね。神なのに」

「まあね。神だからって全てを自由には出来ない、ってことさ。だけどやっぱり僕は、晴神になって良かったと思うよ。空との一体感がとても気持ちいいんだ」

「一体感？」

「うん、僕は空と一心同体だからね」

ハルは空に向かって右手を伸ばした。そうすれば空に手が届くかのように。

「果てしなく広がる空との、本当の意味での一体感。こんなの神でもなきや味わえないよ」

穏やかに微笑んで空を見つめる姿は、本当に幸せそうで。

その姿にふと、青空が大好きと笑う幼馴染の面影が見えた。私は少し後ろめたさを感じて目を伏せる。

私が由美を連れてきていれば、彼女はハルに会えたのだ。晴れの神なんて、由美には是非とも会いたい人物(?)であろう。ハルにしても空好きな子と会えたなら、嬉しかったに違いない。

「……ねえハル、明日もまだここにいる？ 会わせたい人がいるんだけど」

「会わせたい人？」

ハルは空に伸ばした手を下ろすと、きょとんとこちらを見返した。

「うん、私の幼馴染。由美っていうんだけど、きっとハルと話が合うと思うんだ」

いくら由美を思っただけの事だとはいえ、頑なに彼女の屋上行きを拒んだのは、少し思いやりが無かったかもしれない。と、ちょっと反省する私だった。

実は明日にでも鍵を学校に返しておこうと思っていたのだが……。まあ、一日くらいは先延ばしにしてもいいだろう。誰が急かしている訳でもなし。

「どうかな？」

「うん、別にいいよ」

思った通り、ハルは躊躇うことなく了解してくれた。

「けど、何で話が合うと思うんだい？」

「由美は青空が大好きだから」

途端、ハルは嬉しそうに目を細めた。

「それはいいね。空好きが三人集まる訳か」

「三人？」

ハルと由美と、もう一人は……。

「私も入ってるの？」

自分を指差し聞き返す。

「……って、違うのかい？」

目を瞬（しばた）させるハル。

どうやらハルは、私が空好きなのだとは勘違いをしていたらしい。一体いつからそういう話になっていたのか……。

「さっき空の写真を撮ってたから、これはと思って話しかけたんだけど……」

最初からだった。

「あれは由美に頼まれたの。私の意思じゃないよ」

言うてから、少し強く否定し過ぎたかなと思う。少し傷ついたようなハルを見て、私は慌てて付け加えた。

「ま、まあ積極的に好きではないけど、でも嫌いでもないよ」

「そっか」

少し安心したように、ハル。彼は気を取り直すように一息つくと、

「でもその由美って子は、本当に空が好きみたいだね」

「うん、もう空に恋してると言っても過言ではないよ」

「……空に恋、か……」

ハルがしみじみと、懐かしむように呟く。

「? どうしたの」

「僕が晴神になった頃にもいたよ。空に恋したカラスがね」

「空に恋した……カラス? 比喻じゃなくて？」

そう問う私の声音に、好奇心を感じ取ったのだろう。

「せっかくだし話してあげるよ。空に恋したカラスの話を」

そう言ってハルは、その話を始めたのだった。

「昔々ある所に――」

昔々ある所に、一羽のカラスがおりました。

そのカラスは美しい漆黒の羽を持っていました。しかし他の生き物達は、死体にたかる黒い姿が気味悪いと、いつも彼を避けていました。

彼は群れでも孤立していました。というのもそのカラスの瞳は澄んだ青色をしており、群れの中でも気味悪がられていたからなのです。

カラスはいつも独りでした。黒い羽と青い瞳のせいで。

そんなカラスの楽しみはただ一つ、空でした。

カラスは空が大好きでした。夜は自分の羽と同じ漆黒に、昼は自分の瞳と同じ青色になるからです。カラスにとって空は仲間であり友達でした。

カラスは特に雲ひとつない青空が大好きで、毎日空を飛んだり眺めたりして過ごしました。カラスが飛んでいる時、空は彼を拒絶することなく優しく抱いてくれました。

次第にカラスは空のことしか考えられなくなり、来る日も来る日も空を想い続けました。彼は空に恋してしまったのです。

カラスはもっと空の近くへ行きたいと思うようになりました。もっと空を近くに感じたい。空とひとつになりたいと。

狂おしいほどに募る想いが、カラスにある決心をさせました。

ある日の朝、カラスは飛び立ちました。真っ直ぐ、上へ上へと向かって。

カラスは昇り続けました。空とひとつになる為に。

休みなく羽ばたき続ける翼に負荷がかかり痛み出しても、カラスは止まりませんで

した。

上昇とともに呼吸が苦しくなっても、空を求めるその心が翼を動かし続けました。

どんなに苦しくても、羽ばたくほどに空に近づけるのが嬉しくて、ただただカラスは昇り続けました。

けれどもとうとう、カラスは空を落ち始めてしまいました。上昇する程の力が、翼にはもう残っていなかったのです。

カラスは落ち続けました。彼は空と離れていくのが嫌で、疲れ切った翼を必死に動かしました。しかし落下の勢いが弱まるだけで、上昇することは出来ませんでした。

ついにカラスは、飛び立った地面へと戻ってきました。衝突という激しい痛みと共に。

羽ばたきにより勢いを殺された落下の衝撃は、カラスの命をすぐに奪うことはありませんでした。しかし骨を砕き、酷使した翼を折るには十分過ぎるほどの衝撃でした。

カラスはその場から動くことが出来ずに、ただ空を見上げました。カラスの大好きな青空でしたが、果てしなく遠い存在に感じました。折れた翼ではもう空に近づくことは出来ないという事実が、絶望が、カラスの心を押し潰しました。

カラスは鳴きました。悲痛な鳴き声が、辺りに響き渡りました。

心はこんなに空を求めているというのに、何故自分は動けないのか。何故地面に這いつくばって、見上げることにしか出来ないのか。

カラスは空を求めて鳴き続けました。それは叶うことのない哀しい求愛でした。

そしてカラスは――

「――そしてカラスは、息絶えるまでそれを止めることはありませんでした」

ハルの話が終わり、しばしの静寂が辺りを支配した。

「――なんかさ、悲しい話だね」

静寂を打ち破ったのは、ぼつりと漏らした私の呟きだった。ハルは物語った時の余韻に、未だに浸りながら続けてきた。

「うん、悲しい話だよ――ここまではね」

「……え？」

「この話にはまだ続きがあってね」

ハルは詠うように付け足した。

「――死んだカラスを哀れに思った神様は、その魂を使って新たな神を創り出したのでした。彼が空と一つになれるように」

「……」

「ね？ カラスは報われたんだ」

「……………あのさ、それって」

今日はこんな展開ばかりだ。

そんなことを思いながら、ハルに尋ねる。少なくとも悪意だけは感じられない笑みで、私の顔を見ているハルに。

「それって、そのカラスって、ひょっとしてさ――」

口ごもる私の後を、ハルがさらりと引き継いだ。

「ひょっとして僕のことだったりするけどね」

「……………」

「……………」

「……ハル」

「ん？」

「あえて黙ってなかった？ 元カラスってこと」

「うん」

これまたさらりとハルは答える。

ハルが元人間という推理を、実は自信満々に推していたのを思い出し。

「何で！」

やや赤面しながら、ハルを恨めしげに睨みやる。

「そんな顔しないでくれよ。別に悪気があったわけじゃない、一応マキに気を遣った

んだよ」

「私に？」

「うん。僕の本来の姿はカラスなんだけどね」

と、ハルが自分の胸に手を当て言う。

「カラスの姿で人間に話しかけたら、全力疾走で逃げられたことがあってね。だからこう、僕の正体を小出しにしていったら、マキも受け入れやすいんじゃないかな、と。だから外見も、マキが親しみやすそうな姿をとったんだ」

「う……ん。確かにそうかも」

突然カラスに話しかけられたら、不気味さが勝って話を聞くどころではないだろう。それを考えると確かにハルの気遣いは、ありがたかったのかもかもしれない。

にしてもそんなことまで気にするなんて、なかなか奥ゆかしい神様だ。

「ね？ 僕って結構奥ゆかしいだろ？」

「今自分でそう言った時点で、厚かましさが強調されたよ」

すぐさま前言撤回し、私は空を振り仰いだ。茜色に染まった雲が、頭上をゆっくりと流れていく。知らない内に、結構な時間話し込んでいたらしい。

「もうこんな時間かあ」

ぼつりとそう漏らすと、ハルが名残惜しげに言ってきた。

「そっか。君たちはもう帰る時間帯だっけ」

「私ももうちょっと居たいけど、ね。まあ明日も来るし、なんならハルが帰るまで通ってあげるから」

「本当かい？ それは嬉しいよ」

言葉通り嬉しそうに笑うハルに笑い返ししながら、私は内心自分の言った事に驚いていた。

屋上に来るのは、明日で止めにする筈だったのだから……。

(……ま、いっか。せつかくの神様と話せる機会だしね)

「じゃ、明日は由美も連れてくるから」

私はそう言うと、立ち上がってスカートをはいた。それに合わせてハルも立ち上がり、私を見上げて聞いてきた。

「そのユミって子、確か青空が大好きなんだよね？」

「うん、それはもう熱烈にね」

何の迷いもなくそう言い切ると、ハルがにっこり人差し指を立てた。

「じゃあ明日は、雲一つない青空にしてあげるよ」

「って、私的な理由で天気って決めれるの？」

「あんまり。でも一回くらいなら大丈夫じゃないかな」

そういえばハルは、規則を破ってこの世界に来ているんだ。今更規則がどうこうという話でもない。

私は扉まで歩いていくと、荷物を拾って振り返った。ちょうど私とハルが出会った時にいた場所を、入れ替わった形となっている。

「明日楽しみにしててよ。とびっきり真っ青な空の下で、語り合えるようにしてあげる」

「分かった、約束ね」

自信満々に笑みを浮かべるハルに、私はぐっと親指を立てた。

そして後ろ手に、扉の取っ手に手をかける。

「じゃ、バイバイ」

「また明日」

そんなそっけない挨拶を交わした後、私は扉を開いて現実の世界へと帰って行った。

それが私の体験した、その日の不思議の全てだった。

——翌日、晴れの神様はきちんと約束を守ってくれた。

天気は快晴。澄んだ青空。

「ま、確かに悪くはないかもね」

今日の放課後のことを考えて、私はくすりと笑みをこぼした。

[戻る](#)